

平成28年度第1回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかつこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

後藤明良は、根津中学の弱小バスケットボール部のキャプテンをしているが、将来はプロの選手になることを目標としていた。そこへ、全国大会出場常連校から小杉という生徒が転校してきた。しかし小杉はチームメイトになじもうとしなかった。現在のチームに不満を抱いていた明良は、小杉に向かって「うちのチームは雑魚の集まり」だが「身体ならし」程度にはなると言った。小杉は内心チームプレーを望んでいたもので、明良に対して「チームまとめる気ないだろ」、「最低だ」と馬鹿にして笑った。続く文章は、明良がバスケットボール以外にもさまざまな挫折を経験した、その後の場面である。

明良は、これまで母子家庭というハンデをまったく感じてこなかった。

母さんは文句はいうもののおきらかに好きで働いていたし、兄ちゃんも大学にいきながら家事を楽しそうにこなしていて、自分は将来大物になることを期待されている。

自分たちは、そこらの家族より、よっぽど立派だと思ってきた。ずっとレベルが高いと思ってきた。

だけど、実情はちがっていたのだ。

母さんは手助けしてもらった **A** で親戚にこび続け、兄ちゃんはイヤなことから逃げるために家事にのめりこみ、そして、自分はみんなに大事にされるあまりただのかんちがい野郎として育ってしまった。

明良はその事実を、認めないわけにはいかなかった。

くやしいとか哀しいとかムカつくとか、そんな **a** ナマヤサしい挫折ではなく、完璧につぶされた気分だった。

もう二度ともにもどれそうにないくらいに、べしやんにされた気分だった。

兄ちゃんが、家事をしなくなったとたん、家の中はあつという間に荒れはじめた。

たった数日で床にはほこりがたまり、シャワーをあびてない身体や、洗っていない服が臭いはじめ、コンビニ弁当の空き箱は異臭がした。

兄ちゃんはどこでかけているのか、毎日、朝早く家をでて夜遅くまで帰ってこないし、母さんは臭いのも汚いのも平気らしく、相変わらず家事に

手をだそうとしない。

そして明良も、ただその状況をながめるしかなかった。不快だと感じながらも、動く気にならなかった。

自分がこわれているという自覚はあった。

どうしたらいいかわからないとかじゃなく、ただ、身体も心も動かなかった。逃げるようにゲームに **b** ムチュウになつていたあの気力さえなくて、ただ毎日、横になってぼんやりするばかりだった。

電話や玄関のチャイムが鳴っても、動かなかった。しつこく鳴っても、たいていはあきらめてくれるので放っておいた。

あるとき、しつこく玄関のチャイムが鳴ったあと、ガチャリと玄関のドアが開く音がした。母さんがカギをかけてでかけるのを忘れたらしく、さすがに起き上がって様子を見にいった。

「すみません」

それは、きき覚えのある声で、明良はそつと玄関のほうに顔をのぞかせた。

「なんだ、いたのか」

小杉だった。

明良はおどろく元気もなくて「ああ」と返事をした。

「話が……あつて、きた」

小杉がいいにくそうにかすれた声でいう。明良は、返事もせずリビンクにもどると、ソファに寝転んだ。

なんの感情もわかなかつた。なにをしにきたのか知りたいとも思わなかつたし、帰ってくれと強く拒否する気力もなかつた。

「なんか、すごいな」

しかし小杉は、リビンクまで勝手にあがりこんでくると、散らかりぶりに感心したようにつぶやいている。

「うちは、母子家庭だからな」

今までなら、けしてこんな **B** いい方はしなかった。父親がいないのは、離婚ではなく事故死で、優秀な外科医であったことも必ずつけくわえた。そうして、自分は不運ではあるけど、不幸ではないことをアピールした。

「へえ、そうだったのか。大変だな」

こんな風に同情されたくないから、さけてきたい方だった。

「そうだな」

けど今は、どうでもよかつた。どんなに格好つけたところで、これが事

実だ。

自分は、片親の家で育った、ただのかわいいそうな中学生だ。これが、本当の姿。小杉のいうとおり、最低の。

「なんで練習にこない」

明良は小杉のそのセリフにおもわずふきだした。

「なにがおかしいんだよ」

「真野にたのまれたのかよ」

真野もうまいな、と思った。どうやって小杉をコントロールしているのか、さすがとしかいいようがない。

「ちがう、自分でできた」

小杉はムツとしているようだったけれど、明良の心は動かなかった。自分の意志でようが、真野にたのまれてようが、どうでもよかった。

「なんで練習にこない」

小杉がまたくり返す。

「もう、やめるんだよ」

明良は頭をかきむしりながらいった。しばらく洗っていないので、かゆくて仕方なかった。

「よかつたろ？ 最低のキャプテンがいなくなつてさ」

そして、かきむしつたその手をそつと鼻の近くに持ってきてみる。1かいだことのない強烈な異臭がおかしくて、明良は再び激しく頭をかきむしつた。

「オレ……」

しかし小杉は、そんな明良の様子を気にすることなく続けた。

「前の学校で、チームのやつらとうまくいかなくて、もうバスケなんてやめようつて思つてたんだ」

明良は身体を起こすと、シャンプーでもするみたいに、両手を激しく動かした。

「だけど、親の転勤で引越すことになって、新しい学校がここだつて知つて、続ける気になつたんだ」

目の前を白い粉が落ちていく。女子にもうらやましがられるさらさらヘアは、少し手入れしただけで、こんなにもおぞましいものを生み出すのだ。

「オレ、今年の春、根津中の偵察にいったとき、たまたまおまえたちの試合を見てたからさ」

さあ、早く気持ち悪がつて、帰ればいい。

「あの試合中、吉田が突然、コートの中で吐いただろう？」

ほら、汚いだろう？ 臭いだろう？

「そしたら、真野がかけよつて吉田になんていったか覚えてるか？」

「全部吐いていいつて」

明良はあきらめて、頭をかきむしるのをやめた。

「ここで全部吐いていいからつて」

そして、ソファの背もたれに身体をあずけると、小杉を見上げた。

「それで吉田が安心して吐きはじめたなら、久野が背中さすつてやつて、和田と谷口が靴をぬがせてやつてたよ」

小杉は明良のことなんて、見ちゃいなかった。じつと、ぬぎ捨てられた母さんのストッキングを見ていた。結婚式の日にぬぎ捨てられたままの、ストッキングを。

「で、落ち着いた吉田をコートの外に寝かせたあと、みんな迷わずユニフォームぬいで、吉田が吐いたやつをそれでふきはじめたんだ」

さすがに、少しだけはずかしいと感じた。

「衝撃だったよ」

そして、あの試合のことを思いだした。

「スゲー、うらやましかつた。2ああいうチームメイトならよかつたなつて思つたよ。レギュラー欲しさに足のひっぱりあいするような仲間じゃなくて、ああいう仲間とやりたかつたなつて……」

あのとき、明良だけが、遠くからその様子を見ていた。なんで、試合中に吐くんだよと怒つていた。

吉田なんかの世話をやきたくなくて、相手チームのキャプテンのもとに走つて、謝つた。審判に試合の中断を申しこんだ。はずかしくて、とても試合を続ける気になれなかつた。

あのときも、オレは最低だった。

吉田の心配なんてまるでしてやらなかつた。ユニフォームをぬいで、あの汚い嘔吐物をふくなんて、考えられなかつた。

「今、あいつら、オレを受け入れてくれてるよ。小杉ルール（注）を面白がつて、受け入れてくれてるよ」

「よかつたじゃん」
ますます自分が嫌になるようなエピソードを思いださせてくれた小杉に、

明良はいつてやった。

「3 いい仲間にくぐりあえて、よかつたじゃん」
瀕死状態の自分にとどめをさしにきてくれて、本当にありがとう。

しかし、小杉は明良に近づくといいた。

「バーカ。全然よくないね」

そして、明良の胸ぐらをつかむと、無理やりソファから立たせて顔を近づけてきた。

「いいか、よくきけ」

小杉はなぜか怒っていた。

「あいつらの目的は、あくまで、おまえなんだよ。おまえにもどってきてほしくて、オレを受け入れてるんだよ！」

いつている意味も、わからなかった。

「あいつらはな、コーチがいなくなっても、オレがいれば後藤は必ず帰ってくるってバカみたいに信じてるんだよ！ オレとコンビプレイがしたくて帰ってくるってな」

小杉はますますcコウフンして、強く胸ぐらをつかんでくる。

「だから『小杉ルール』なんていう変なルールにつきあつてまで、オレのことを受け入れているんだよ！ オレは単なる当て馬なんだよ。おまえがもどってくるためのエサなんだよ。そんなこともわかんないのかよ、バカヤロウ！」

そこで急に小杉の手がはなれ、明良はそのままソファにしりもちをついた。

「いつたい、おまえのどかがいいんだよ」

小杉はくやしそうに顔をゆがめて続けた。

「オレには、わからないね」

一方、明良はそんな小杉を、やつぱりぼんやりと見上げるばかりだった。

みんなが自分を待っている。そのために、小杉を受け入れている。

もしそれが本当なら、それこそ小杉のいうとおり、わからなかった。いつたい自分のどかがよくて待っているのか、さつぱりわからない。

しかし、それはいかにもあいつらが考えそうなことで、やりそうなことではあった。

「まつたく、うらやましいよ……」

小杉がぼそりといつた。

「そういう仲間がいるおまえが、うらやましい」

不愉快そうに、くり返している。

「だから、帰つてやれよ」

小杉はそういうと、ちらりと明良を見た。

「本気でバスケをやりたいが、つるおまえに協力したくて、コーチのしごきにきあつていた、あいつらの気持ちにこたえてやれよな」

部屋にただよう異臭が、急に強くなった気がした。

「不愉快なオレを受け入れてまで、おまえが帰ってくるのを待ってるあいつらの気持ちに、こたえてやれよな」

4 自分の臭さに吐き気がした。

「いいたいことは、それだけだ」

小杉はそういうと、そのままドスドスと部屋からでていった。

明良はそのままの姿勢で、宙を見上げているばかりだった。「うらやましい」とつぶやいた小杉の声だけが、いつまでも耳の奥に残っていた。

どうしてかは、自分でもよくわからなかった。

ただ、小杉がきたあとから、明良の身体は急に動くようになった。まず、臭くてしかたない服をぬいでシャワーをあびた。身体も髪も洗って、下着や服を着替えた。それから、弁当の空き箱や空のペットボトルなど、捨てるべきものを次々にゴミ袋につっこんでいった。

(草野たき『リリース』(ポプラ社)より)

(注) 小杉ルール 小杉が、現在のチームのレベルに合わせるために、怪我をしたふりをして片手で部活動に参加したことを指す。副キャプテンの真野が名付けた。

問1 傍線部 a、b、c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 **A**・**B** に最もふさわしいことをそれぞれ次の中から選び、

記号で答えなさい。

A ア 後ろめたさ

イ 歯がゆさ

ウ ウ うれしさ

エ あさましさ

B ア すなおな

イ あつげらんとした

ウ かなしそうな

エ おぎなりな

問3 傍線部1「かいだことのない強烈な異臭がおかしくて」とありますが、ここには明良のどのような気持ちが表れていますか。それについて説明した次の文章の「ア」～「エ」にふさわしいことばを書きなさい。ただし、ア～ウは指定の字数で本文中より抜き出し、エは自分で考えてひらがな二字で答えなさい。

少し前までの明良は、自分自身をみんなにうらやましがられるような「ア 六字」人間だと思っていた。だがそれは「イ 五字」であり、本当の自分は「ア」ではなく、正反対の「ウ 二字」な人間だったと思うようになっていた。そんな思いもよらない真の自分の姿を「エ」笑う気持ちが表れている。

問4 傍線部2「ああいうチームメイトならよかった」とありますが、明良を訪問した際、小杉は「ああいうチームメイト」がとった行動と同じような行動を結果的にとっています。それはどんな行動ですか。次の「」に合うように四十字以上四十五字以内で具体的に書きなさい。

かつて試合中に嘔吐した吉田にかけより、汚れることも構わず懸命に助けようとしたチームメイトと同じように、「」こと。

問5 傍線部3「いい仲間めぐりあって、よかつたじゃん」とありますが、ここでの明良の心情として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 小杉の気持ちなど実はどうでもよく、自分の思いやりのなさを痛感し、さらに絶望的な気持ちになっている。

イ 小杉がようやくバスケットボール部の仲間と溶け込めたことに安心する一方で、どうしようもなく嫉妬にかられている。

ウ 小杉が望み通りにいい仲間めぐりあえたのに、自分は嫌われてしまったという現実からひたすら目をそらし、何も考えないようにしている。

エ 小杉がうらやましがっていた仲間を自分も今さらながら誇らしく思い、かえってひどい自己嫌悪に陥っている。

問6 傍線部4「自分の臭さに吐き気がした」とありますが、これはどのようなことを表していますか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア どうしようもない明良も受け入れてくれる仲間たちの前向きな思いを知ったことで、すぐに心を入れ替えて生きていこうという明良の強い決意が生まれたということ。

イ 明良の帰りを熱心に待っていてくれる仲間の存在に気付いたことで、仲間に対して罪悪感を覚えるとともに、ますます現在の自分自身にあきらめを感じているということ。

ウ 仲間たちの思いやりや優しさに触れたことで、明良の頑なな心がほぐれ、自分を待っていてくれた仲間へ恩返しをしたいという抑えがたい衝動が湧き上がってきたということ。

エ どんな自分も受け止めてくれる仲間の存在に気付いた明良が、周囲に心を閉ざして自らの不幸を嘆くだけであったそれまでの自分に強い違和感を覚えているということ。

問7 二重傍線部について、小杉は「うらやましい」という言葉を繰り返していますが、結局小杉はどんな仲間がいる明良を「うらやましい」と思っているのですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 力を合わせれば、いくらでも強くなれると思う仲間。

イ 打算なくどこまでも明良のことを思い、信じる仲間。

ウ 明良の理想のために、自らを犠牲にしようとする仲間。

エ 苦しんでいる時に、力づくでも助けてくれる仲間。

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

これからの時代、人類にとつてよい未来を切り開いていくためには、科学者だけでなく、一般の人々も科学を知らなければならぬ。すべての人間が科学的でなくてはいけない。そんなふうにいわれる。

その発想は何も今に始まったものではなく、戦後からずっと続いてきた風潮だと思ふ。子どもたちに科学的な見方・考え方を教育する運動というのも十年、二十年前からあつた。

自分が研究者と呼ばれる者になり、ぼく自身、そうだ、ぼくは科学をやっているんだ、という気になつたころ、ふと気がつく。世の中には、普通の人も日常生活を科学的に考えなければというテレビ番組や新聞・雑誌の記事があふれていた。

「科学的に見ないとちゃんと正しくものが理解できない」

そういう意見を耳にしてはよく疑問に思つた。じゃあ、科学的に見ればちゃんとものがわかるというのは、ほんとうのことなんだろうか。そもそも科学というのはそんなにちゃんとしたものなんだろうか。そんなことをつい考へてしまつたのだ。

それからは1科学的といわれる態度をめぐつてずいぶん議論した。

科学的にこうだと考えられるという話が、しばらくするとまつたく間違ひだつたということがよくある。

たとえば、ある昆虫が非常に的確に行動しており、獲物をつかまえるにはどこから近づいて、相手のどこを狙えばいいかちゃんと知つていて、それを実行しているという。

実際にその様子を目撃すると確かにすごいなと思ふ。そのいきものにはそういう行動のパターンがあり、それに則つてハンティングしているという科学的説明がされ、実に納得する。

でもほんとうにずっと観察していると、その説明ではダメな場合もたくさんあるということがわかつてくる。

では人間の打ち立てた科学的説明とは、いったい何なのだ。そういうことを思うようになった。

自然界の事例をたくさん見れば、いきものが失敗することはままある。科学的にこういう2習性があるから、そのいきものの行動はこのように予想がつくと教わつたが、どうもそううまくいかない場合がたくさんあるらしい。

ならば世の中に理屈はないかという、ないわけではない。うまくいった場合は、なるほど、こうしたからうまくいったのかということとがわかり、うまくいかない場合も、こうしたからまずかつたのかということがわかる。

しかし、理屈がわかつてもその通りにならないことはたくさんあつて、よくわからなくなつた。ほんとうにそういうものがあるのか。

こんな議論もした。絵を描くときに、ある色を作り出すとする。何色と何色を混ぜればその色ができるという理屈はわかっているから、それにしたがうと近い色が出てくる。でも近いだけでその色になるわけではない。

理想通りにうまくいくことのほうがめずらしいのであつて、現実にはノイズが入るのが普通ではないか。

つまりこの世はめちやくちやな力オスというわけではなく、そこには何か筋道があるらしい。それを探るためには科学的にもものを見ることが大切だ。それ以外に、ささやかな筋道すら見つける方法はないということだ。

となるとぼくには、今度は、科学的にもものを見るときはということかがわからなくなつた。どういうことが科学的な手法なのか。

そのころぼくが手がけた翻訳書のひとつに『鼻行類』(ハラルト・シュテンプケ著 日高敏隆、羽田節子訳 平凡社ライブラリー)という本がある。今は消滅した群島に生息していたという、鼻で歩く奇妙ないきものこのことを記述した本だ。

翻訳しているとき、周囲にはさんざんにいわれた。だいたいそんな動物はいない。そこに書いてある話はずいぶん決まっているじゃないかと。

ところがそこにはみごとに理屈があり、3鼻行類という生物種がいて、その中でも肉食のもの、花に擬態するものなどさまざまに分かれていて、それぞれどうやって生きていくかまで細かく書いてある。解剖図まである。

そういう、いわば理論生物学ともいえる話を、ハラルト・シュテンプケというドイツ人が考へた。

人間は理屈にしたがつてもものを考えるので、理屈が通ると実証されなくても信じてしまう。

実は人間の信じているものの大部分はそういうことではないだろうか。いつもぼくが思つていたのは、科学的にもものを見るときも、そういうたぐいのことで、そう信じているからそう思うだけなのではないかということだ。

本来い動物の話、あたかもいるように理屈っぽく考えて示すと、人はそれにだまされる。

真に受けた学生や大学教授もずいぶんいた。正式な問い合わせやしょうほん標本貸出の依頼もあつたくらいだ。

そういう結果になるようなことを、なぜあなたは研究者としてやったのか。はじめからうそだとわかっているものをやるのは研究者としてよくないと、その当時ずいぶん怒られた。

それに対してはこう答えていた。人間はどんな意味であれ、きちんとした筋道がつくとそれを信じ込んでしまうということがおもしろかったので、そのことを笑ってやりたいと思つて出したのです。わたしたちはこっけいな動物だということを示したかったです、と。

すると今度は、あなたは人が悪いといわれた。

そもそも理屈は人間だけのものかという、そうではない。

こうだからこうなるだろうという推測は動物もしている。

たとえばここにフンがあれば、それを残した動物がわかり、近くにその動物すなわち食いものがあるようだと推察する。どのくらいの理屈かということはあるけれど。

人間の場合は、筋さえつけば現実に存在してしまうところまでいくのが特徴だ。

鼻行類は、徹底的に理屈をこねるとほんとうに存在することになるといふ、よい例だろう。

著者は、よくぞそこまできるといふくらい、いっしょけんめい考えた。それは、遊びとしてすぐおもしろい遊びで、人間はその遊びがすぐ好きなのだ。そしてときにそうした遊びに もする。そういう動物はほかにいない。

そのことに気がついている人は、『機械の中の幽霊』（日高敏隆、長野敬訳 ちくま学芸文庫）を書いたアーサー・ケストラーをはじめとして、昔からけっこういる。

ちゃんとした理屈に則つていると思えるような議論をすると、幽霊でも何でも存在すると証明できてしまう。

それをおもしろがるのはよいけれど、理屈にだまされることには気をつけなければ、と思つた。そして次に、それで遊んでやろう、あるいは人を遊ばせてやろうと思つた。

何が科学的かということとは別に、まず、人間は論理が通れば正しいと考えるほどバカであるという、そのことを知つていふことが大事だと思ふ。

そこをカバーするには、4 自分の中に複数の視点を持つこと、ひとつのことを違った目で見られることではないかと思ふ。

一般の人は科学の目で、逆に科学者は一般の人の目でものを見ると、いつもとは別の見方が開けるだろう。誰にとつてもものごとを相対化して見ることは必要だ。

普通、我々は、科学的な目とは、あるパターンのものの方だと思つている。日常、人々はいちいち科学的なパターンでものを見ないから、正しくないようにいわれるがそんなことはない。

正しく見えることと、ほんとうに正しいかどうかは関係ない。そう見れば見えるというだけの話だ。

また若手の研究者だつたころから、ずいぶんそういう議論をしてきた。

相手は自分たちを進歩的だと思つている科学者の会だつたりしたから、その人たちにはきつとどうしようもない人間だと思われていただろう。

しかしぼくは、科学もひとつのものの方にはすぎないと教えてくれるいくつかの書物に早く出会えて、ほんとうによかつたと思つている。

おかげで科学によつて正しい世界が見えると信じ込む人間にならずにすんだ。

西欧はキリスト教という一神教を信じるがゆえに、絶対の神の法則を解き明かす科学が発展したという。

しかし多くの学んだフランスは、西欧の一部ではあるが、西欧的になつていない人が、数少ないながらもいるところだつた。

その意味でヨーロッパの知識層はすごいと思つている。生きる自信を宗教に頼らない層がちゃんとある。もちろんキリスト教に頼る一般の人々は非常に多いけれど。

そういう、西欧的でない人は絶えず悩みながら生きている。楽ではないから。

でもそういう人たちに出会つたときは、非常にうれしかった。

彼らはものごとを相対化して見るツールのひとつとして科学を使つてい

る。科学が絶対と信じ、それを唯一のものの方とする姿勢ではないのだ。神であれ、科学であれ、ひとつのことにしがみついて精神のまは基盤とすることは、これまでの人類が抱えてきた弱さ、幼さであり、これからはそういう

人間精神の基盤をも相対化しないといけないのではないか。

頼るものがあるほうが人間は楽だ。それにしたいが、疑問には目をつぶればいいのだから。

でも引きこもりやカルト、無差別殺人といったさまざまな現代の問題には、どれも自分の精神のよって立つところを求めて、暗い洞窟(どうくつ)に入り込んでいった様子が見える。

どんなものも見方も相対化して考えてごらんなさい。科学もそのうちのひとつの見方として。

自分の精神のよって立つところに、いつさい、これは絶対というところはないと思うと不安になるが、その不安の中で、もがきながら耐(た)えることが、これから生きていくことになるのではないかとぼくは思う。

近い将来、人類はほんとうに無重力空間に出ていく。

ならばその精神もまた同じように、絶対のよりどころのない状態をよしとできるように成長することが大切ではないだろうか。

それはとても不安定だけれど、それでこそ、生きていくことが楽しくなるのではないだろうか。

(日高敏隆『世界を、こんなふうに見てごらん』〔集英社〕より)

問1 傍線部1「科学的といわれる態度をめぐってずいぶん議論した」とありますが、この議論の結果、筆者は「科学的といわれる態度」をどのようにとらえましたか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 世の中にあるはずの筋道を見つげるために、理屈でものごとを考えようとする態度。

イ 日常生活に生かすために、自然界に存在する様々な法則を探り出そうとする態度。

ウ 自然界に存在する全ての事例に対し、実験という手法を使って、誰もが理解できる唯一の法則を見つけようとする態度。

エ 理屈や筋道というものを根底から疑い、この世の中の現実をよく見つめようとする態度。

問2 傍線部2「習性」を言い換えている部分を本文中から五字以上十字以

内で抜き出さない。

問3 傍線部3「鼻行類」とありますが、筆者はこの文章で、どのようなことをいうために鼻行類というものを紹介しているのですか。本文中のことばを用いて、解答欄に合うように四十字以上四十五字以内で書きなさい。ただし、次の二つのことばを必ず用いなさい。

実証 動物

問4 に最もふさわしい慣用語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 足が出たり

イ あげ足をとられたり

ウ 足を棒にしたたり

エ 足もとをすくわれたり

問5 傍線部4「自分の中に複数の視点を持つこと」とありますが、それはどのようなことですか。本文中から十字以上十五字以内で抜き出さない。

問6 筆者の主張として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 科学も一つのものの見方であって、絶対的に正しいというわけではない。

イ 科学者こそ、ものごとを柔軟に考える一般の人と同じような考え方に改める必要がある。

ウ この世界には法則がないからこそ、科学者がそれを創造しなければならぬ。

エ 科学はものごとを見るひとつのツールにすぎないので、自分が信じるよりどころを探すべきだ。

「以下余白」

